科目区分：中等教育コース（国語）
授業科目名：日本近代文学研究
担当教員：国語教育講座、青木亮人

「日本近代文学研究」の授業評価

１．授業の基本情報

日本近代文学研究は、教育学部生三年次以上を対象とし、多くは二年次の日本近代文学概説の受講者である。」、令和元年度は１８名が受講した。

本年度の各回授業は下記の通りである。

01:愛媛と近代文学の官界
02:愛媛と俳句、種田山頭火について１
03:山頭火ゆかりの地を実地調査､コラム発表１
04:山頭火ゆかりの地を実地調査、コラム発表２
05:愛媛と近代文学の関係について１
06:愛媛と俳句、正岡子規について１
08:愛媛と俳句、正岡子規について２
09:子規ゆかりの地を実地調査､コラム発表１
10:子規ゆかりの地を実地調査､コラム発表２
11:愛媛と近代文学の関係について２
12:愛媛と近代文学の関係について３
13:愛媛と俳句、高浜虚子について
14:愛媛と近代文学について､コラムについて
15:まとめ

２．授業評価・授業研究の内容

学生にアンケートを行ったところ、下記のような感想や意見があった。

・自分の土地の文化や文学について今まで知る機会がなく、また知ろうとしなかったことなどに気付いた。文学や文化を学ぶことは一つの見方だけでなく、多様な見方があることに気付いた。
・愛媛大学近くに正岡子規や種田山頭火、高浜虚子ゆかりの地がこんなに多かったことに驚いた。
・愛媛県全体に多くのゆかりの文学作品や映画、絵画等の文化があることをこれまで知らず、自分の郷里に豊かな文化土壌があることを学ぶことができた。
・座学形式で知識を得るだけではなく、自分で実際にゆかりの地を訪れ、その場の雰囲気を体験すると、活字だけでは分からない実感を得ることができ、活字作品の雰囲気をより味わうことができた。
・自分が学ぶだけではなく、自身が調べたことや現地で体感したこと等をコラムという形式にまとめた上で他者に読んでもらい、自分も他者のコラムを読み、感想を言い合ったりすることで自分だけでは気付けない自身の感性の偏りや文章の特徴等を知ることができ、新鮮だった。
･文学作品の読解は､内容や筋を理解したり、主人公の心情を理解する中でその作品が面白いか否かを判断する傾向が小学校から培われる傾向にあるが、有名か無名か、分かりやすいか否かでなく､自分の郷里や住んでいる県、土地に関係があるか否かで文学作品を横断する感覚は今までなかったので、新鮮だった。

上記のような結果となった。

３．地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

受講生に最初の授業で確認したところ、これまでの学校教育で自分の生まれ育った地域社会ゆかりの文学や文化を知る機会はほぼなかったという声が大部分だったため、まずは教科書教育における「国民文学」と、それぞれの地域社会に根ざした「郷土文学」の位相が異なることを教示した。その上で、「郷土文学」を学ぶことで従来の国語教育とどの点が異なるかを講義しながら、実際にゆかりの地を訪れ、座学形式ではなくフィールドワークを通して体感することで「郷土文学」の位相を実感してもらうことは、座学で得る知識と異なる知見を得る場合が多いことを受講生に体感してもらうようにした。それは将来、受講生が教員になった際、国語のみならず勉

強には多くの学び方や気付きのあり方が存在すること自体に気付いてもらうための方途であることも講義した。

幸い、愛媛大学は近くに近代俳句ゆかりの地が多々存在しており、複数の文学作品の舞台となった現地に訪れることが可能な立地のため、フィールドワークを授業の一環に取り入れることができた。

上記の授業を経ることで、著名文学者や多様な芸術家が実は愛媛や各受講生の出身地にゆかりが深いことを確認してもらいつつ、実際の作品や逸話等を紹介することで、これらを研究することが地域社会文化全体を捉え直すことになり、また教科書掲載の著名文学者や作品そのものの再解釈にもつながることを説き、また文章のみならず写真やテレビ番組等も随時参照しつつ、日本国民が一致して学ぶべき教科書文化と異なる、「芸術と郷土」を各地域の学校教育で実践した際の効果や留意点等を授業展開の中で述べた。

難しさについては、参照資料自体が専門的な性格の資料も多く、仮に受講生が本科目で「文学と郷土」という視点を獲得したとしても、受講生が将来教員となった際、授業準備の際に本科目以外の芸術家や文学者を扱う際の専門資料をどの程度収集し、分析可能かは実際の教員生活に則して仮定すると困難な点も多い。従って、本科目で示した知見は一知識に留まり、将来の教育実践まで発展させることが可能か否かは本科目の授業目的と異なる受講生の資料収集能力に係っている点が多い。本科目で受講生に示した知見をいかに将来の教育実践に直結させるためのさらなる工夫が必要と感じられた。